

日本は、国民署名が三千万人、それに宗教者の得たものを加えて約三千万以上の核反対の署名を提出し、世界全体では、一億五百万人ほどの署名が行なわれたけれども、その署名の国連引渡式は、四年前のそれに比べると、あまりに簡略であつて、なるべく目立たないような形でなされ、こうした扱いに対して、各国代表団から強い不満の声が出されていた。

軍縮総会の席で、日本の鈴木善幸首相の軍縮についての演説を傍聴したが、それは、いままでの方針をのべているにすぎず、相変らず美辭麗句をならべた抽象論ばかりで、具体的なものは何らなく、実際とは矛盾する話であつた。

こうした実情を考えると、平和運動の前途にはいろいろな問題があり、そうした諸問題には、宗教者の立場からこれをすすめていないと、今後ますます混乱が生じてくると感じた。また今後、一般社会の側からは、宗教者にいろいろと求めてくる点が多々あるかと思う。そういう視野にたつて、今日の日蓮宗の現状を顧みると、かならずしもそういう問題に対して真剣に取組んでい

るとはみられない。反核の署名にしろ、集会などにおける発言や行動にしても、海外でパツパツと名前が出てくるのは、創価学会や立正佼成会ばかりで、日蓮宗の名はどこにも出てこない。そうかといつて、なにも派手にやることが平和運動ではないが、日蓮聖人の立正安国の精神に立つならば、おのずから世界へ進出していくようであればならないと思う。いままで何人かが個人レベルの立場で行動しているのであるが、これからは、世界に向つて発言できる宗門あげての立正平和運動を盛りあげ、立正安国の精神を広めていかなければならない、と強く感じて帰国した。

## 文書視聴覚教化の事例と効果

中 村 潤 一  
(福岡県真浄寺修徒)

現在の宗門の現状としては、文書伝道や布教活動を行

なっているところが非常に少ない。これには、第一にお金の問題、また寺が忙しくてできない等々いろいろあるわけだが、これが実態である。その文書伝道の一歩の武器は、なんらかの形で檀信徒の中に残っているというのが大いなる効果ではないだろうか。私は、現在、教箋・掲示板・テレフォン説教の3本立てで、教化活動を実行している。

これらについて、まず教箋は、一般の人たちが読んでも、抵抗のない、成程と思うようなものを選んで発行している。私は、これによって、如何にして日蓮宗の寺に人を集めるかということよりも、如何にして日蓮宗の寺院が対社会的に通用する団体であるかということが、大きなテーマではないかと思っている。これは、日蓮宗というものが対社会的にどのくらい貢献できるかということである。こういうところを、宗門自身はより多く見据えていって欲しいところである。このように、自分の宗教（立場）が社会的機能（社会的立場）として通用するかという問題を認識していくことが大事である。これには、自分が持っている法華経的素養あるいは法華経的立

場を如何に社会的な物に還元するかを、一番大きなテーマとして活動しなければならぬ。法華経をもつ社会的要素に還元して、広がりある法華経の立場にもどらなければいけないのではなからうか。

私の教箋について言えば、教箋の下に功德主という欄を作り、ここにスポンサーの名前を入れてある。これはただお金をを出してもらうためだけでは意味がなく、法事・追善供養のためでもあるし、また、自分がお金を出すということは、全ての社会に対して供養することであるし、先祖供養のためでもあるという意味から、功德主という名前で、スポンサーの名前や先祖代々のことを入れてある。月に三人ぐらいの申し込みがあるし、また費用は分割して払って頂くことにしている。この教箋を自分の寺で千部発行している。他の寺にも利用して頂きたいということで、一部につき十円ということに決めて配っており、大体月に八百枚ぐらい出ている。このように利用してもらって一番大事なこととは、忙がしい人や寺も、他の寺が作った物を大いに利用して頂きたいということ、そして他の寺との協力が必要であるとい

うことである。

次に掲示板は、寺の存在を認識してもらおうことや、寺がどういうことを考えているのかということや、寺をわかってもらいたい等々の効果があり、是非他の人達にもやってもらいたい。掲示板の方法としては、できるだけ住職の考えや時代に即応するもの、また、なにか一般の人々にわかりやすいことを書いてもらいたい。私の寺では、普通の掲示板では言いにくいことが入りきれない場合は、もう一つ大きな黒板を隣に置いて使っている。そして掲示文句を集めて文章に直し、小冊子として発行して檀家に配っている。まだ第一集ができただけであるが、大体二千部ぐらい発行した。これは単価が一冊につき五百円程であった。

最後に、テレフォン説教であるが、宗門では、東京と大阪をキー・ステーションにして毎週放送しているが、九州からでは、昼だと六百円かかり、夜だと三百円ぐらいかかる。たった三分間でこんなにお金を取られるのは、聞かないということになってしまった。そこで、我々だけでテレフォン説教を作ろうということになり、現在

に至って二年半、週に直すと百二十二週目に入っている。五軒の寺の若い教師とメンバーを組んで行なっている。

これには、自分一人でするというのは、タネもなくなり、仕事もきつくなるので、できるだけお互いの寺が団結しあつて、寺という枠を超えて新しい宗門の組織づくりができないかということがあつて、日蓮宗の若手の坊さんでやるテレフォン説教がスタートしたのである。

最初は、珍しがられて千回ほど受信数があつたが、最近では、あきられてやつと六百回になるかならないかという立場になっている。しかし、少なくとも寺がそういうことをやってくれるという安心感・存在感というのが、檀信徒の間には定着している。最初はなかなか定着しないが、少なくとも檀信徒が、寺は法事や葬儀ばかりではなく、こういうこともしているんだという認識は持つてくれたと思うのである。受信数は、六百回で週に直すと、百四十〜百五十回である。この中で、本当に聞いてくれるのは百四十〜百五十軒の信者で、後援してくれる数は七百〜八百人である。七百〜八百人は聞かなくても、その存在は知っていることになる。これらの人々から年間

千円を頂き、年間八十万円ぐらゐの予算をもらい活動している。また会員が八百人もいれば、それらの人々を対象に、年二回、一泊二日の研修会を開いて、本当の檀信徒の育成を考えている。

それからもう一つやっているのは、年に二回の講演会、自分の寺だけでなく、会員の寺を利用して、会場を移しながら講演会を開催している。

これからの宗門にとって一番大事なことは、自分の寺というよりも、自分の寺の枠を超えて、新しい日蓮宗としての組織づくり、寺をつなぐ活動をしていかなければならないことではないだろうか。自分の寺以外の寺へ、もつと言えば、日蓮宗全体、広く言えば、仏教、さらにもつと言えば、宗教心そのものを啓発していく運動を、日蓮宗がしなければ、単に日蓮宗という団体が、形式的な宗教の枠の中で枯渇してしまうんではないかと思う。日蓮宗あるいは自分の寺が、いかにして社会に対して機能を發揮しているか、ということに目をむけていく時に、文書視聴覚運動というものがもつと普及していかなければならない問題があるのではないかと思うのである。

(注) 各要旨は、現宗研主催第一回教化学研究会での発表を、現宗研所員高橋謙祐・望月兼雄がまとめたものである。